



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4500号 2018.7.21 発行

花谷寿人の体温計 出会わなきゃ損

毎日新聞 2018年7月19日

月に1度届く「ぷかぷかしんぶん」を楽しみにしている。

発行元は横浜市のNPO法人「ぷかぷか」。知的障害のある人たちが働くパン屋やカフェを運営する。店の取材がきっかけで、イベントや店の商品案内を載せたしんぶんを送ってくれる。

いつもまず目に留まるのは封筒の表書きだ。角張った文字で住所と宛名が丁寧に書いている。パン屋で会った彼らのうちの一人だろうか。そんなことを思いながら封を切る。

ぷかぷかの若者は伸び伸びとしている。記憶力抜群で、海外の都市の名前をすらすら言えるツジさん。しゃべる時にまず「ああああああ」と言葉が出るセノーさん……。地元ファンは増えた。理事長の高崎明さん（69）は彼らと一緒にいることがうれしくてたまらないように見える。

高崎さんが考え続けているのは2年前の7月26日に相模原市で起きた障害者殺傷事件だ。「障害者なんかいなくなればいい」。加害者のゆがんだ思考を社会はどう受け止めてきたか。グループホームを建てようとするすると反対運動が起きる。何も変わっていないのではないかと。

高崎さんには養護学校の教師を30年務めた経験がある。何がいちばんよかったか。「私自身が自由になれたこと」。いつもふんぞりかえって歩いているので「社長」と呼ばれる子がいた。しょっちゅうお漏らしし、ぬれたパンツは脱ぎ捨て、裸でうろうろする。

パンツをはかすが、またお漏らししてパンツを脱ぐ。天気の良い日、社長は芝生の上で裸のまま気持ちよさそうに大の字で寝転ぶ。パンツをはかせることを繰り返すうちに、高崎さんは思った。社長は社長のままでいるほうがいいのではないかと。おれはいったい何をやっているんだ。自分を縛っていた「規範」の一つがポロッと取れたという。

高崎さんは彼らのことをもっと知ってもらおうと、地元の公共施設で音楽や演劇の公演を定期的に関く。パン屋で会った人たちがステージでライトを浴び、拍手をもらって顔を輝かせている。観客も彼らから力ももらっている。私も観客の一人としてそう感じた。

公演のチラシに「見なきゃ損」とあった。私たちは実は損をしているのではないかと。障害者との「共生」と言う前に。（論説委員）

相模原殺傷事件、2年控え追悼式 19人 悼み「やすらかに」

共同通信 2018年7月14日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刺殺され、職員2人を含む26人が負傷した事件から今月26日で2年となるのを前に、建て替えのための仮移転先となっている横浜市港南区の「芹が谷園舎」で14日、追悼式が営まれた。遺族や入所者、職員ら約200人が参列し、犠牲者を悼んだ。

参列者によると、体育館のステージに設けられた祭壇には花文字で「やすらかに」と書かれ、19本のろうそくが並んだ。参列者は黙とうをささげ、献花した。

家族会の大月和真会長（68）は「私たちは決してあなた方を忘れない。安らかに眠ってください」と述べた。

やまゆり園事件から2年 入所者の親らが投げかける「事件の本質」とは？



AERA 2018年7月16日号
大月和真さんと長男の寛也さん。和真さんが優しく声をかけると、寛也さんは笑ってうなづくしぐさを見せる。今回、自分にできることは何でしようという思いから、取材に応じてくれた（撮影／写真部・小山幸佑）



取り壊し工事が始まった、津久井やまゆり園。事件現場となった居住棟などは今年度中に解体され、管理棟と体育館などは改修される。新しい建物は2021年度中の完成を目指す（撮影／編集部・野村

昌二）

殺傷事件から間もなく2年。現場は再生に向けて動き出しているが、今も被告の障害者差別は続く。障害者が置かれた状況も、変わっていない。二度と悲劇を起こさないために、国や私たちはどうすべきか。19人が殺害され27人が負傷した事件現場は今、白いフェンスに囲まれ建て替えに向けた工事が進む。ここではかつて、入所者たちの笑い声があふれていた。

2016年7月26日、事件が起きた日、大月寛也（ひろや）さん（37）は、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で暮らしていた。入所者が次々とナイフで刺殺された、「戦後最悪」とされる事件が起きた場所だ。殺人などの罪で逮捕・起訴されたのは、この施設の元職員の植松聖（うえまつさとし）被告（28）だった。

寛也さんの父親の和真（かずま）さん（68）によれば、自閉症の寛也さんは18歳の時に津久井やまゆり園に入所した。事件が起きた時、寛也さんは被告の襲撃を免れたエリアにいたため無事だった。だが、事件直後、一時帰宅から施設に戻った際は、なかなか居住棟に入ろうとせず、ホーム（生活エリア）に着くまで母親の腕をつかんでいたという。いままでも一度もなかったことだ。

「いつもと違う異様な雰囲気、寛也なりに感じとっていたのだと思います」

寛也さんは昨年4月から、仮移転した「芹（せり）が谷（や）園舎」（横浜市港南区）に移り、事件前と変わらずマイペースで生活できている。しかし、負傷した利用者の中には、刃物を連想するため爪を切るのを怖がったり、一人でトイレに行けなかったりする人もいると聞き、「精神的な癒えない傷は今も残っているのではないかと和真さんは言う。

被告の弱者への差別意識が、なぜ凶悪犯罪へと至ったのか。なぜ無抵抗の人間の命を奪ったのか。ヒトラーが降臨したなどと気取る被告は、報道機関などに送った手紙に「意思疎通がとれない人間を安楽死させるべきだ」と記している。

だが、先の和真さんは強く否定する。

「寛也は何を話しかけてもうなずきます。言葉を一言も話さないのに、本当は何を考えているのか分からないのですが、でも何となく意思疎通はできています。『ご飯だよ』といえ、テーブルについてくれます」

今回の事件が社会に大きな衝撃を与えたのは、単に犠牲者が多かったからというだけで

はない。これまで日本社会が直視してこなかった問題が噴出したからだ。事件は、さまざまな問題を社会に投げかけた。

●「稼げば勝ち」という考えが排外的な差別意識を生む

精神科医の香山リカさんは、事件は、今の社会を覆う排外的な差別意識が突出したものだと言っている。

「経済至上主義や成果主義の中、稼げば勝ち、利益を上げない人は価値がないという考えが世界の一つの『原則』になっています。そうした中、自分と異なるものへの想像力がなくなり、異質なものは排除してもいい、自分の考えは世間の支持を得られるのではないかと考えたのではないのでしょうか」

日本障害者協議会（東京都新宿区）の代表、藤井克徳（かつのり）さん（68）は、事件後の対応や関連する動きから、障害者が置かれている立場が浮き彫りになったと話している。

「まずは、警察による犠牲者の匿名発表がありました」

今回、神奈川県警は犠牲者全員を匿名で発表した。通常、殺人事件では警察は被害者を実名で発表するが、同県警は匿名にした理由について「遺族の強い要望」としている。

実際、家族に知的障害者がいることを知られたくないという遺族もいた。しかしそのため、犠牲者は匿名のまま社会から忘れられ、彼らの人生はほとんど振り返られることはなく、事件を正当化する被告の供述だけが大きく報じられている。藤井さんは言う。

「隠さざるを得なかったのは、障害者への偏見という社会の本質的な問題が潜んでいるからとみるべきです」

次に藤井さんが挙げるのが、事件後も利用者は長く同じ敷地内で暮らしていたことだ。最後まで残った入所者 39 人が芹が谷園舎に移ったのは、17 年 4 月。約 9 カ月もかかったのは、障害者の人権や感性を理解していると思えないデリカシーを欠いた事態と指摘している。

「心のバランスをとるためにも、少しでも早く凄惨な現場から遠ざかるべきでした」

最後に、大規模入所施設の問題を挙げる。津久井やまゆり園のような障害者を対象とした入所施設は、全国に約 3 千カ所。施設での虐待や身体拘束は後を絶たず、地域社会から遠隔地にあるものも少なくない。施設以外に安心して預ける場がないため、消去法で大規模施設に入らざるを得ない現状があるという。藤井さんは厳しく批判している。

「やまゆり園の事件の後、厚生労働省が出した対策は、措置入院制度の見直しと施設の防犯対策の徹底のみ。あまりにも対症療法的なものにとどまっている。障害者が置かれた状況も環境も、2 年前と変わっていない」

●事件の背景に何があったか総括も検証もされていない

事件が起きる直前の 16 年 4 月には「障害者差別解消法」が施行された。第 1 条では障害の有無に関係なく「相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会」の実現を目指すとしている。法の精神には大半の人が賛同するが、多くの人に障害者に対する差別感情は根強く残り、「多様性」や「共生」といった言葉だけが躍る。

二度と悲劇を繰り返さないためにどうすればいいか。私たち社会は、障害者とどう向き合うべきなのか。

冒頭で紹介した大月さんは、仕事の悩みや不満を抱える職員を支える相談支援体制の整備が必要と話している。

「仕事の葛藤や不安を抱えている職員に専門的なカウンセリングを通して心の安定を図り、不適格であれば、別の仕事を斡旋することなどができればと思います」

次男（47）がやまゆり園のグループホームに入所している杉山昌明（まさあき）さん（78）は、大切なのは知的障害者に対する理解をもっと広げることだと話している。

「たとえば、電車内で障害者が大声を上げたり、走り回ったりしていると、乗客の方は怖がります。それは障害者のことを知らないからです。多くの人が障害者のことを知れば理解が進み、十分な支援があれば障害者が地域で普通に生活できるようになるのではないかと思います」

前出の藤井さんは、「共生」という言葉を進化させた「インクルージョン」が重要と説いている。

障害者も健常者も、ともに生き、ともに支えあう社会を意味する言葉だ。

「インクルージョンの実現のためには、今回の事件の背景に何があったかをあらゆる角度から総括し検証すること。事件から2年たっても国も社会も真剣に行っていない。総括も検証もないところに、社会の発展はありません」

ナイフを向けられたのは、私たち社会、そして私たち一人ひとりでもあるのだ。(編集部・野村昌二)

植松被告は優生思想もヘイトクライムも知らなかった やまゆり園事件から2年

AERA 2018年7月19日



西角純志 (にしかど・じゅんじ) / 1965年生まれ。専修大学講師(社会思想史)。主な著作に『移動する理論』(御茶の水書房)など(写真:本人提供)

神奈川県相模原市の障害施設「津久井やまゆり園」で、19人が殺害され27人が負傷した殺傷事件から間もなく2年。「やまゆり園事件」被告と面会続ける元職員が問う差別の構造とは。

拘置所にいる被告と面会を続けている人物がいる。

津久井やまゆり園の元職員で、専修大学講師(社会思想史)の西角純志(にしかどじゅんじ)さん(53)。やまゆり園の職員として01~05年の間、亡くなった19人のうち7人の生活支援を担当していた。犠牲者の「生きた証し」を残そうと、遺族や職員たちへの聞き取り活動も続ける。西角さんによれば、被告は今も

「自分は社会にとって正しいことをした」と話しているという。弱者を「国家や社会の敵」とみなす。このゆがんだ被告の思想はなぜ生まれたのか。西角さんに聞いた。

津久井やまゆり園の事件の背景には、植松聖被告自身の優生思想やヘイトクライム(憎悪犯罪)があるなどと言われています。

しかし、面会を続けて分かったのですが、被告は優生思想もヘイトクライムという言葉も、ナチスが障害者らを大量殺害した「T4作戦」も知りませんでした。事件後の報道や差し入れられた本などで知識をつけ、結果的にそれを自ら犯した殺人を正当化するのに利用しているのだと感じました。

被告は、自分が殺したのは意思疎通の取れない者であり、それは「心失者(しんしつしゃ)である」と述べています。つまり、殺したのは「人間ではなかった」と言っているのです。では何だったのか。

私は、19人の犠牲者は法権から置き去りにされた「法外な他者」であったと考えています。例えば、ナチスに殺害されたユダヤ人がそうです。彼らは人種差別を正当化したニュルンベルク法によって市民権を奪われており、「最終解決」と称した大虐殺の時には完全に国籍を剥奪(はくだつ)されました。人間と見なされず殺害しても法が適用されないのが、人間を殺したことにならず殺人罪に問えなかったのです。

犠牲になった19人は異例の「匿名発表」でしたが、「犠牲者は障害者だから」という理由に私たちは納得させられているのです。私は遺族とも面会を重ね、遺族が匿名を希望する理由もよくわかります。

しかし、匿名発表はそれ自体が差別を生み、19人は社会に存在しなかったことにされています。彼ら、彼女らは法の外に追いやられ、「法外な他者」にさせられたのです。今回の事件の本質はその点にあると考えています。

いまなお日本の社会には、優生思想や障害者差別が色濃く残っています。被告の言動はきわめて危険ですが、それは、ある意味、市民社会に対する挑戦で、国家や社会の力量が試されているといえます。(編集部・野村昌二)

ラブ・エロ・ピースが叫ぶ、ショウガイシャのリアル「伝えないと正直な思いは出てこない」 リアルサウンド 2018年7月17日

世田谷区三軒茶屋にある Café「ゆうじ屋」の店主であり、生まれたときから重度のショウガイを抱えながらも、毎日一人電動車椅子でケーキを売り歩く実方裕二さんは、お邪魔ん裕二という名前でメンバーに重度ショウガイシャ三人を要するアウトサイダーフォークパンクバンド「ラブ・エロ・ピース」というバンド活動をしている。

重度ショウガイシャで車椅子に乗りながら、言語障害のあるボーカルお邪魔ん裕二のシャウトは全身全霊を込めた凄まじいボーカルで、介助者の助けを受けながらではあるが、ライブで観客にメッセージを訴えかける。

そのラブ・エロ・ピースのアルバムが、トータルプロデュースに<less than TV>の代表である FUCKER こと谷ぐち順を迎え、8月8日に発売されることとなった。

ライブを体験しこの作品を聴くことで、より伝わるものが深く刻まれるバンドであるが、まずはボーカルであるお邪魔ん裕二のインタビューで、ラブ・エロ・ピースを感じて欲しい。(ISHIYA) ケーキ売りもバンドも、俺にとっては訴えかける運動



――それでまた、バンドをやりたいと思ったのはなぜですか？

裕二：ゆうじ屋ができたときに、今のバンドメンバーでもある女装飲んだくれオヤジ菅原ニョキが一人で歌ってくれてて、ニョキの歌が好きで彼がやるときはカウンターの中で一緒に歌ってた。うちのお店以外の会場で僕の企画でライブをやることになって、そのときにニョキと一緒にやらせてくれて言った。それからだね。ニョキが歌ってる歌が世の中を見つめた歌で「いいなあ」と思って、一緒に歌いたいなと思っただけなんだ。でもそのライブで歌ったときは声が出なかったんだよね。

――人前で表現することはもともと好きだったんですか？

裕二：10年以上前からお笑いもやってて、その頃はお笑いをやってる介助士と一緒にカレーを作ったりしてたから、作りながら掛け合いみたいになっててね。ケーキをイベントとかでも売るんだけど、ただ売ってるだけより何かアピールした方が売れるし、一般的には僕みたいな重度ショウガイシャは料理なんかできないんだろうと思われることが多いんです。だから、ショウガイシャがこうやって料理もやれるんだ、そうじゃねえんだよっていうことを伝えながらケーキが売ればいいかなと。よくショウガイシャっていうと、聖人君子みたいなイメージってあるじゃん。冗談じゃない。スケベで嘘もつくし、ショウガイシャで聖人君子なんていないよっていうことを伝えてやろうと思って。でもそのお

笑いの一発目も声が出なかった。自分の言語障害に結構コンプレックスがあるからね。
――それで今はバンドじゃないですか。伝えたいことがあっても諦める人が多いのに、重度のショウガイを持ちながらやるというモチベーションはなんですか？

裕二：ケーキを売りに養護学校にもよく行って、ショウガイの子どもたちが本当にかわいいんだよね。子どもたちが生き生きやりたいことをやれる世の中にしなきゃなって。今の世の中のままじゃ悪すぎるよね。だから僕たちができるところでやっていく責任があるんだろうなと。ケーキ売りもバンドも、俺にとっては訴えかける運動なんだよね。

――そこまで子どもたちを思っているのに、「かまわれたい」の歌詞では〈他人のことを思う癖がついていない〉と歌ってますよね？

裕二：そう、やっぱり自分のことが中心になってるよね。僕みたいな重度のショウガイシャって、子どもの頃から構われるんだよ。親は普通の健常者だから、ショウガイシャとの付き合い方がわからない。ショウガイがよくならないとわかったとき、この子を守らなきゃいけないと思っちゃうわけよ。だから何でもかんでもやってあげる。構われることが癖になる。



そういうショウガイシャの状態も伝えていかないとわかんないわけさ。自分の中で「もっと伝えなきゃな」という思いもあるしね。だから「かまわれたい」はね、ほかのショウガイシャに頭にきてるときに書いたんだよ。僕もそうだけど、ショウガイシャって被害者意識の塊みたいなのところもあって、その辺も伝えないと健常者からも正直な思いは出てこない。だから、僕たちから伝えていかなきゃいけないっていうのがあるんだけど、ショウガイシャの中には周りの責任にして自分のことは棚にあげる人が多くて頭にきていて。「かまわれたい」の歌詞の二番は健常者に向けてだけじゃなくショウガイシャにも向けている。〈困ってるのはお前だけじゃねえだろ！生きてるのもお前だけじゃねえだろ！〉って。

――「ラブ・エロ・ピース」という歌で〈自分の差別を許さない〉と歌っていますが、裕二さん自身も健常者を差別してしまっているという認識であってますか？

裕二：いや、ショウガイシャに対しても差別してる。そういう差別意識があるから今の世の中は成り立ってるんだと思うし、それによって自分が差別されて屈辱的な思いも味わってるんです。だから「ふつう」という曲で〈じぶんと じぶんが ころしあう〉っていうのはそういう意味なんです。アルバムの1曲目が「かまわれたい」で、自分の嫌なところを構われたらいいという思いだけで、他人のことを思えないところが自分にもあるっていうことがわかって、他人のことを考える癖をつけようとゆうじ屋を始めた。だから2曲目が「ケーキ売り」なんだ。やまゆり園のこと（※2016年に起こった「相模原障害者殺傷事件」）があって、健常者が当たり前の世の中で、自分を肯定できずに健常者になりたがったり健常者に憧れたりしてしまうんです。だから他のショウガイシャとも付き合いたくないという気持ちも芽生えてしまう。そういう自分が改めてわかった「ふつう」。4曲目はそういう自分のことばかり考えている間にも、仲間のショウガイシャは山奥の施設に追いやられているんだという現状を歌った「同級生」なんです。

――「狼」という最後の曲は、裕二さんが書いている歌詞ではないですが〈Anti Japan〉という思いはありますか？

裕二：あるでしょう！ やっぱ。これだけ悪いことばかりやってる国なんだから、アンチと言わずになんて言う。

自由＝自分がやりたいことをやっているかどうか

――裕二さんにとって「自由」ってどんなものですか？ この



記事を読む人の多くも、ショウガイを持っているということがどういうことかわからない人だと思うんです。読者に向けて、「自由」が一つわかりやすい表現になるかと思うんですが。

裕二：僕は親から離れて自由な生活をしたいと思って家を出たのは40年ぐらい前でね。僕には2つぐらい違う兄貴がいて、僕が高校の頃、僕の面倒は兄貴がほとんどやってくれた。でも兄貴は大学生だったから遊びにも行きたいわけじゃん。親は「出かけてもいいけど、裕二を寝かせてから出かけて」って言うわけよ。

高校の頃だと、10時頃だからまだまだ寝たくないんで兄貴も板挟みになるわけ。ある日兄貴が俺を寝かせようとしたときに「なんで俺だけ寝なきゃいけないんだ！俺だって起きていたいんだ！なんで兄貴だけ出かけるんだよ！」って言っちゃったわけ。それまで兄貴が俺に合わせてくれているから喧嘩なんてしたことないんだけど、そのとき初めて兄貴が俺を軽くだけ殴った。泣きながら。

その頃はちょうどショウガイシャ運動が世田谷で盛り上がった頃で、その輪の中で俺が一番若かったから、若手No.1とか言われて有頂天になってたんだけどね。その当時彼女がいて一緒に暮らしてたんだけど、色々あって同棲は一年半で終わった。それから俺は夜ショウガイシャ運動の会議に出て、終わって呑みに行って夜中帰って寝て、午後起きてパチンコ行って会議に行ってるという繰り返したんだよね。一方では自分たちが住んでる地域の人たちと付き合っ、ショウガイシャのことを理解してもらうんだとか言ってたんだけど、そんな生活だから生活パターンが合わないんだよね。そういう生活を5~6年してるときに、世田谷以外にできた友達がいる、最初はよく呑んだりして付き合ってくれてたんだけど、見るに見かねて俺を怒ってくれてね。「お前いい加減にしろよ！ショウガイシャだからって甘えるのもたいがいにしろ！働け！」って。

そのときまで俺、怒られたことなかったんだよね。親もちやほやすするだけで。自分も「このままでいいのかな」とか思ってたし、運動やっても自分の言葉じゃなくて先輩たちの言葉を鵝鵝返しにしてる感じだったしね。働けて言われて、自分の周りも家族も俺が働けるなんて考えもしないわけ。だから自分でも「本当に働けるのかな？」っていう感じで諦めて。そいつに「ゆうじ何かやりたいことないのかよ」って言われて、当時介助と結構手の込んだカレーを作ってた「カレー屋をやりたい」って言っちゃったんだよね。そしたらその友達が「面白えじゃん」って。自分たちのイベントをやりたい、ライブハウスには食べ物と飲み物が必要だから「裕二用意しろ、責任持ってやれ」と言われて始まったのがゆうじ屋。

自由って本当に自分がやりたいことをやれているかどうかだと思う。俺はパチンコとか呑み屋とか行って、そのときは楽しいけど自分の中で本当に納得してなかったもんね。自分が納得できるためには、色んな人から怒られたり影響を受けたりしないといけないんだよね。ショウガイシャの場合経験が少ないから、余計そういうところは大きいかもしれないけど、健全者もショウガイシャもないような気がする。ただ、圧倒的にショウガイシャの方が世の中に出て行くチャンスが少ない。だから今でも自由とか、自分が納得できるまでまだまだですね。納得して死にたいからね。

――最後に、読者に向けて何か伝えたいことがあれば。

裕二：ショウガイシャが世の中に出て行くチャンスが圧倒的に奪われてるって言ったじゃん。それって周りが諦めてるんだよね。親も養護学校の先生も、施設の職員も「こんなもんだらう」って。僕もラブ・エロ・ピースを始めて、自分で自分の歌を聴いて最初は「なんだこりゃ？」って。無理してやってるのも「健全者を追いかけてるだけなのかな？」って思って、やり始めて2年ぐらい経ったときに「やめた方がいいのかな？」ってマジで迷ってたんだよ。昔から一緒にライブ活動をやってた30年ぐらいの付き合いの奴がいるんだけど、そいつが「裕二さんが好きだったら続けられ？好きなことは続けた方がいいと思うよ」って言ってくれて。

好きだからね、音楽。どうせ続けるんだったら自分の歌のイメージに少しでも近づけた

いと思って、たまたまボイストレーニングの先生と知り合いになって、やってみようと思
って続けて一年ぐらい経つけど、声が大きく出るようになった。多分今も細かいところは
わかりにくいんだろうけど、声が響くようになったんだよ。あそこでボイトレをやらなか
ったら、たぶん CD を作ろうなんていう思いにはならなかったかもしれない。だから諦め
ない！ 周りの仲間が諦めないでいてくれるから生きてるんだと思います。だからこうい
う姿を見て欲しいんだよね。色んなショウガイシャも健常者も、やればできるんだって
いうことを少しでもわかってくれれば最高ですね。

(取材・文=ISHIYA)

■ラブ・エロ・ピース

2013年、世田谷の千歳鳥山で行われている路上演劇祭でデビュー。当初、女装飲んだくれ
オヤジ菅原ニョキと、お邪魔ん裕二のフォークパンクユニットとして、スタート。cafe ゆ
うじ屋をホームグラウンドに、イベント等に出没。2015年、キーボードのヨーコが「私にも
やらせろ」といいながら加わる。

2016年7月、津久井やまゆり園事件が起きる。その衝撃から、より精力的に活動を展開。
2017年10月に刊行された書籍「生きている！殺すな～やまゆり園事件の起きる時代に生
きる障害者たち～」の付属CDに、代表曲「死んでない 殺すな」を収録。

このレコーディングを契機に、ギターのしぶしぶのノリー、ボイス・コーラスのボイスふみ
が正式参加。その後、パーカッションのお染のマサトも加入。メンバーはさらに増殖中。
ストリート、ライブハウス、カフェ、ところかまわず叫び続ける。やまゆり園事件を忘れ
るな！



2018年7月28日@新宿Motion

ラブ・エロ・ピース 1st FULL ALBUM

『ラブ・エロ・ピース』

リリースパーティー

OPEN 18:00 / START 19:00
発売 2,300円(税別) 2,100円(税別) 大阪府民限定

企画

FUCKER

羊歯明神 (音楽プロデューサー・主催)

ラブ・エロ・ピース

チケット予約: motionmotion.jp
会場 Motion 世田谷区東船場4-24-2 プラザビル1F
TEL: 5166-1176



■リリース情報

『ラブ・エロ・ピース』 8月8日(水)
発売 2,300円+税

<収録曲>

1. かまわれたい
2. ケーキ売り
3. ふつう
4. 同級生
5. 何のために
6. ラブ・エロ・ピース
7. 狼

【メンバー構成】

女装飲んだくれオヤジ菅原ニョキ (Vocal,
Acoustic Guitar)

お邪魔ん裕二 (Vocal)

嵐を呼ぶキーボードヨーコ (Keyboard)

しぶしぶのノリー (Electric Guitar)

ボイスふみ (Chorus)

【ゲストの仲間】

ab3 (Bass)

joji kurosawa (Drums,

Cajón)

ladyeria (Sax)



石塚弓子 (Chorus)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行